

龍澤寺文書から見る室町時代史

あわら市郷土歴史資料館
文化財専門調査員 車谷 航

はじめに～龍澤寺ってどんなお寺？～

【沿革】

・永徳2年(1382)、坪江荘の豪族おぶせよしうじ小布施義氏を旦那として、梅山ばいざんもんほん聞本(美濃国出身)が平田山へいでんさん龍澤寺を開山(曹洞宗)。

・住持は、梅山の意向により、5年ずつ交代して入寺する輪住制をとる。

⇒明治時代以降は、独住制に移行し現在に至る。

・開山梅山聞本直筆の文書をはじめ、越前守護斯波氏・戦国大名朝倉氏・織田信長・柴田勝家・結城秀康などの武家文書が多く伝来する『龍澤寺文書』⇒福井県指定文化財(165点)

1. 足利義満の拈香文を獲得せよ！

① 二つの書状

→応永21年(1414)5月、4代将軍足利義持の意向により、鹿苑院殿(足利義満=3代将軍。義持の父)の七回忌法要のための拈香文執筆の依頼がなされる。

※足利義満は、応永15年(1407)5月6日に死去。

⇒越前守護斯波道孝・越前守護代甲斐祐徳から(応永21年)5月3日付で義満の「拈香」執筆を依頼。二通の書状は同時に出されている。守護の文書を守護代が補完する関係。純粋な行政文書的な性格を有する。

② もうひとつの伝達ルート～将軍近習の書状～

・富樫満成の書状((応永21年)5月2日付)。斯波・甲斐書状の一日前にしたためられる。

→「鹿苑院殿」(義満)の「御七年御佛事」のための必要経費50貫(約500万円)を梅山に遣わした旨を記す。詳細は、守護代甲斐祐徳から申し述べることを約す。

⇒龍澤寺への伝達ルートは二つあった。

2. 将軍足利義持の内意～梅山禅師とお近づきになりたい～

① 富樫満成からの度重なる書状

両度、「上意(将軍義持の意向)」により、富樫から書状を差し上げた旨が記される。

「向後においては連々言上せしむべく候」

→これからは、こちらから（将軍の内意）を次第に連絡申し上げます。
同時に「五色（香合、盆など5種類の進物）」を梅山に進上。
⇒富樫満成を介して将軍足利義持に直結するルートでやりとりが開始される。

② 梅山禅師の家出事件！？

応永 21 年（1414）8 月、梅山聞本、旦那小布施氏に対して置文を残して「逐電」。
「愚僧（梅山）ハ逐電仕候上ハ、龍澤寺ハ我寺にてなく候、ともかくも旦那之御計たるべく候」

→私が寺を飛び出した以上は、龍澤寺は私の寺ではありません。あとは旦那（小布施）のほうでなんとかやってください。

⇒こうした事態に室町幕府が動く（（応永 21 年）8 月 12 日富樫満成書状）。富樫満成が将軍義持の意向を受けて、梅山に龍澤寺に戻るよう説得する。

・梅山逐電の理由は、将軍義持からの度重なる上洛要請に不満を持ったことが原因か。中央権力と距離を置きたい梅山の気持ちが全面に出た事件。

③ 貴重な富樫満成の書状

富樫満成は、4 代将軍足利義持が寵愛した近習。しかし、近習は将軍の権力と密接に結びついているがゆえに、諸大名との軋轢が生じやすく、活動は短期間になりやすい。

※富樫満成も例外ではなく、応永 25 年（1418）に室町幕府を揺るがす大事件（義嗣事件）に巻き込まれ、翌年暗殺される。

⇒『龍澤寺文書』中の富樫満成書状数点は、数年間の将軍側近としての満成の活動を知るうえでとても貴重な資料！

3. イチオシの古文書「折紙（銭）」

① 折紙（銭）について

・龍澤寺から「三千疋」を進上した際の折紙。贈答目録としての役割を果たす。

※従来は大きい料紙を折って使用されたと思われるが、卷子に貼り継ぐ際、下の余白部分をカットしたか。

・「疋」は銭の単位で、貫高（室町時代の貨幣単位）に換算すると 30 貫文。現在の貨幣価値で約 300 万円。

・実際に、折紙に記載された額に応じて支払われた銭を「折紙銭」という。

なぜ、進上したはずの折紙が龍澤寺に遺されたのか？ どこに進上されたのか？

② 折紙銭の請取状

・折紙と一緒に貼り継がれた古文書がカギ。「靱井」による請取状。

→長禄 2 年（1458）12 月 24 日付け。「此分」＝龍澤寺が進上した三千疋の銭を指すか。「靱井」なる人物が龍澤寺に差し出し、決済された折紙を同時に返却したか。

※「靱井」とは何者か。

→室町幕府の御倉奉行を務め、将軍家への進物の保管に当たる。

※室町幕府には国庫がなく、義満以来、将軍家の財産は土倉や同朋衆らが保管などを担う。

→靱井はそのなかで奉行を勤める。長禄3年(1459)段階では、折紙銭の保管も務める。

⇒長禄2年の龍澤寺折紙も靱井が収納し、請取状を出して返却したか。

③ 折紙のその後～どのように返却されるか～

・「加判」や「合点」を付して、贈与者に返却される。

・「封裏」「下書」のように、納入された旨の文言を日付とともに折紙の裏に書き加えられて返却される場合もあった。

※事例として靱井以外の幕府関係者によるもの。龍澤寺の場合は、靱井自身が請取状をしたため、折紙には加筆せずに返却されている点が注目される。

④ 折紙進上の背景～長禄2年(1458)とは～

長禄2年(1458)7月、八代将軍足利義政、内大臣に任官。

⇒龍澤寺の折紙銭は、義政の任内大臣に対して進上されたものか。

※長禄2年当時、龍澤寺は室町幕府の「御祈願所」となっていた(『蔭涼軒日録』長禄2年11月19日条)。その関係から、龍澤寺は巨額の折紙銭を幕府に抛出したか。

※ちなみに千疋(10貫)未満の折紙銭は認められていなかった。

折紙銭の金額は、個人や寺院と室町幕府との政治的な距離を表す。

⑤ 龍澤寺の財源はどこから？

その財源を知るうえで貴重なのが、長禄2年当時の寺領リスト(「越前国坂北郡坪江郷簾尾村龍澤禅寺寺領目録」『龍澤寺文書』)。

→守護家斯波氏の内紛(長禄合戦)を受けて、寺領の保護を室町幕府に求めるため、幕府に提出したもの。

⇒折紙進上の頃の龍澤寺の財源がわかる貴重な資料!

4. 龍澤寺とその後の権力者たち

・応仁元年(1467)～文明9年(1477)、応仁・文明の乱

→朝倉氏が越前を平定するなかで、越前に在国する身近な権力者として龍澤寺を保護する。

・初代孝景(英林)以降、歴代朝倉氏の惣領(貞景・孝景・義景)が龍澤寺の所領を安堵。

・その姿勢は、越前国主柴田勝家・結城秀康へと受け継がれる。

参考文献

・福井県『福井県史』資料編4・中近世2、1984年。

・あわら市郷土歴史資料館編『あわらの古刹 御簾尾龍澤寺宝物展』あわら市教育委員会、

2016年。

- ・宇佐美倫太郎「龍澤寺文書二題—原本調査の成果から—」（『若越郷土研究』第70巻1号（320）、2025年）。
- ・金子拓「室町時代における贈与交換—進物折紙と室町幕府財政—」（同著『中世武家政権と政治秩序』吉川弘文館、1998年、初出1996年）。
- ・木下昌規『足利義政』（ミネルヴァ書房、2025年）。
- ・桜井英治「折紙銭と一五世紀の贈与経済」（同著『交換・権力・文化—ひとつの日本中世社会論—』みすず書房、2017年、初出1996年）。
- ・桜井英治「〔御物〕の経済」（同上、初出2002年）。

もっと知識を深めたい方へ～おススメの参考文献～

- ・桜井英治『室町人の精神』（講談社学術文庫、2009年、原版2001年）。
→三代将軍足利義満の治世から応仁・文明の乱後までの時代を、政治・経済・文化から説き起こした室町時代の入門書。本講座で触れた「義嗣事件」における富樫満成の失脚について詳細に検討している。現代人とは異なる独特な感性をもつ室町人の特徴を知るうえで非常におススメ！
- ・桜井英治『贈与の歴史学』（中公新書、2011年）。
→中世において頻繁に行われた贈与について分析。その豊富な事例から、贈与と経済との関係性について考察している。本講座で触れた折紙銭のメカニズムを詳細に解説している。贈与が強制力をもち、室町幕府の財源に繰り込まれていたことは、当時の室町幕府財政を知るうえでも必見！